

第5回小樽市立学校の規模・配置の在り方検討委員会 会議概略

日 時 : 平成18年11月30日(木) 9:30 ~ 10:35
場 所 : 小樽市教育委員会庁舎3階 第2会議室
欠席委員 : 山本委員
事 務 局 : 教育部長、教育部次長(学校教育担当)、
指導室長、教育部次長(社会教育担当)、
教育部主幹(適正配置担当)、総務管理課長、
指導室主幹、学校教育課主査

(注)・発言にかかる委員の個人名は表記しておりません。

事務局

おはようございます。大変お寒い中をご出席いただきまして、ありがとうございます。本日の会議でございますが、山本委員が欠席ということになってございます。吉田委員につきましては、若干遅れているものと思います。それでは議事の方を、委員長よろしくお願いいたします。

委員長

皆さん、おはようございます。本日は、第5回目の検討委員会でございます。本日の会議録の署名人は、田中委員と野村委員にお願いします。よろしいでしょうか。

それでは、さっそく本日の議題に入ります。

前回お示ししました、「(学校の適正配置に関する)意見交換のための論点の整理」でございます。今回は、この整理の中の「1」「2」まで行いました。前半では法令上どのような基準になっているのか。適正配置の方法にどんな手段があるのか。現在、小樽市ではどんな配置の状況になっているのか。それから具体的な問題点として、皆さんの方からいろいろ自由に、現状について特にご指摘をいただいたところでございます。

本日は、引き続きまして「3」ですが、それでは「小樽市の適正配置を考える際の視点」は、ということでございます。特にどんな点に小樽市の場合には考慮しなければいけないのか。具体的に小樽市の状況を念頭に置いていただいて、議論を進めたいと考えております。

まず、「(1)望ましい小中学校の適正配置」というのは、どういうことなのか。特に小樽のことを考えながら議論を進めていただきたいのですが、これは、今までにも、前回にも、お話しをいただいたこともございます。例えば、法令上の基準としては、非常に抽象的な事ですけども、教育上適切な環境に配慮しなくてはならないとか、距離でいいますと、大ざっぱに、小学校であれば4キロ以内とか、中学校であれば6キロ以内とか、このような基準もあるようです。しかし、やはりもう少し具体的に、それじゃあどういう適正配置、配置というのはどんな事ではなくてはいけないのか、ということについては、いろいろまた考えなくてはならないと思われま

す。大ざっぱに、思いついた点を挙げてみますと、例えば、4キロ以内・6キロ以内というような基準が一応あるにしても、やはり児童が疲労を感じない程度の適正な距離は必要ではないか。距離だけで考えるという訳にもいきませんが、4キロ・6キロ以内の範囲内で、やはり疲労を感じない程度の距離が必要だろうと

それから、児童の居住分布、これも考えなければいけない。その場合、現状だけではなくて、将来の人口の推計といいますか、やはりこのようなことを念頭に置きながら、適正配置を考えるということになるかと思われま

えば、安全上の配慮、これも必要ではないか。安全といいますが、交通安全の問題であるとか、あるいは防犯上の問題もある。人通りの全くないようなところを、なるべく避けるとか、そのような通学経路の問題があろうかと思われま。それから、特に小学校の場合でしたか、通学というのは、それ自体がひとつの教育的な面に資するところもある。これは経験から言ってもそうなんですけど、そのようなことも配慮しなくてはいけない、ということもあろうかと思われま。

そのようなことを大体思いついた訳ですけども、皆さんの方からさらにまた、望ましい小中学校の適正配置というのは、どんなことを考慮しなくてはいけないのか。大事なことは、適正規模・学校の規模、これも当然に視野には入れなければいけないんですけども、規模だけを視野に入れて考える訳にはいかないと。先程言いましたように、距離であるとか、あるいは通学区域であるとか、通学経路であるとか、いろんな点を総合的に考えなきゃいけないと、こういうこともあろうかと思いま。この点について皆さんがどんなふうにお考えなのか、何かありましたら挙げていただければよろしいかと考えております。

それから、適正配置を考える際に、先程挙げましたようないろんな点を考慮しなければいけないということは言えますが、その他に、小中学校というのは、やはりいろんな地域の歴史的な役割を果たしてきた、あるいはいろんな地域的な事情があると。そういうような事を考えますと、地域の保護者なり、あるいは地域住民とのいろんな共通理解が必要だと。そのために、いろんな十分な配慮もしなくてはいけないと。こういうことも、やはり考えなくてはいけないと思われま。そのようなことになるのではないかと。さらには皆さん、こんなこともあるんじゃないか、適正配置を考えるにはこのようなことも考慮に入れる必要があるんじゃないのか、ということがありましたら、どんどん挙げていただければよろしいかと思っております。

それから、小学校と中学校の配置の関係、これは(3)のところでもまたあらためて考えていただく必要があろうかと思っておりますけど、この両者の均衡といいま。うか、小学校の通学区域、中学校の通学区域、大幅に違うというのでは、交友関係、友人関係についてもいろいろ問題が出てきそうな気がいたしますので、その辺のバランスも考えながら配置をするというようなことになるのではないかと思いま。すけど。

この委員会の考え方としては、いろいろご意見を今までにも挙げていただいたところですけども、どうも一面的な面ではなかなか解決できない、こういう問題がありそうだと。いうところでは、皆さんの共通の理解を得られているのではないかと。単なる距離だけの問題ではなさそうだと、あるいは単なる学校の規模だけの問題でもなさそうだと。いろんな点を総合的に考えなければ、適正配置ということについての方向性もなかなか見出し難いという気がいたしております。そんなような全体的な考え方の中で、さらに皆さんの方で、あれもあるのではないかと、これもあるのではないかと、ということであれば挙げていただければと、こういうことと。ご。ざ。い。ま。す。

委員

なかなか意見が出ないというよりも、大体これまでの4回の中で、規模も、それから今日、配置を考える際の視点ということで4つの柱に沿って論議を深めていくことになってるんですけど、議事録を読ませていただくと、大体その中で意見等は網羅されてきたのかなという印象を持てます。

ただ、繰り返しになるかもしれませんが、前回、事務局の方から法律の施行令に従って距離のことが一応の目安として示されてますけど、これは全国津々浦々いろんな地域にあてはめた、あくまでも基準に過ぎない訳ですから。ただ、小樽の子供達にとってどうなのかと考える際につきましては、特に小学校の4キロ、前回の話しの中では子供の足で歩いて1時間弱の時間がかかるという話しが出てまいりま。したけども、やはり小学校の低学年、1年生に入学する子供達のこと、その事を第1に考えていかなければならないのではないかなと思てます。

じゃあ、逆に中学生の6キロは適切なのかというと、そうではないんですけども、最大限、大人として考えていかなければならないのは、小学校1年生にあがった時の子供達の状況、低学年の子供達の学校生活～登下校を含めて～、そこが一番私達としては考慮しなければならない問題だと考えています。

ですから、(4)とも関連するんですけども、配置につきましては、何が適切かという問題もありますけど、大体これまでの会議の中で意見が出てきて、出し尽くしたとは言いませんけども、ほぼそれを整理するしかないのかなという気がしております。

委員長

この4キロ・6キロというのは、あくまでも「おおむね」小学校の場合4キロ以内と、こういうことですよね。4キロが適切・適正というのではなくて、「おおむね」4キロ以内、中学校でいえば「おおむね」6キロ以内と、こういうようなことで、統廃合のような場合の目安といいますか、それで考えてるようですから、これに必ずしも拘束されることはない、とらわれることはないと思っております。やはり、これはひとつの基準でありまして、地域的な事情、これもやはり考慮に入れなければならない、そういうことが言えると思っております。

それから、前回出ておりましたけど、やはり通学区域の関係で著しく時間がかかるというようなことについては、例えば、スクールバスとかそういうような手段もあるのかと、こういうことを前回伺いましたので、バス通学といいますか、そういうような交通手段の確保によっても、距離的な面ではある程度カバーできるかもしれない。私なんかは、そういう公共交通機関をむしろ利用することで、交通マナーを身につけたり、結構教育的な側面でも役に立つ部分もあるのではないかと、こう考えてますけど。

大体よろしいでしょうか。この検討委員会の大枠としてのまとめ方としては、配置の適正、あるべきあるいは望ましい配置の適正というのは、必ずしも一面的な面で考えるべきではなくて、先程挙げましたいろんな要素を総合的に配慮しながら結論を出すべきだと、こういうようなことで一応押さえておきたいと思っております。

それから、これも今までに、ご意見をいろんなところでいただいたことなんですけど、「(2)小規模校、過小規模校、大規模校」、この規模との関係でございます。何といたしても配置の適正を考える場合に大きな要因といいますか、学校の規模ということがやはり前提になりますので、この点につきましてもご意見をいただきましたが、一応ここでまとめるような形で整理しておきたいと思っております。

ここでの今までのご議論では、一応、標準規模校、これはある程度複数学級、標準学級、これを理想型といいますか望ましい規模校としては考えておきつつも、だからといって小規模校、過小規模校、これについては全て切り捨てるというような態度ではなく、やはり地域的な実情・状況も考えながら検討すべきであると。

それから、現状のみでなく、人口動態等についての推計、将来構想と言いますか、将来への見込みと言いますか、これをも考慮に入れながら考えるべきだと。

大体こんなようなことで、これも大枠ではありますけど、そんなような皆さんの共通理解ではなかったかと思っております。その点でも、それでよろしいかどうか、そのような考え方でよろしいかどうか、あらためて確認のようなことになりますけど、よろしいでしょうか。

(委員から「はい、よろしいです」の声あり)

委員長

よろしゅうございましょうか。

最終的にまとめの段階では、検討委員会の大枠は、この委員会全体の考え方として示しますけれども、いただいた意見を参考にしながら、全体の作文といいますか、報告書の作成については、いろんな考え方は、やはりちりばめながらまとめていきたいと考えております。

それから、「(3)小学校と中学校の配置の関係」でございます。これは先程、私

が少しふれた点なんですけど、これもやはり無視できない。これも今まで出てきたこととございます。交友関係等を考えますと、小学校と中学校の通学区域が大きく異なるというのでは困る。いくつかの小学校の通学区域が、中学校の場合に、ある特定の中学校にまとまるというようなことに結果的にはなるんだろうと思いますけど、そういうことも必要であろうと思われま。この点についても、あまり異論のないところではないかと思っております。

それから、「(4)小樽市で考慮すべき特別な事情」、これは、どんな点を考えたらよろしいのか。「特殊小樽的な事情」というものは、やはりあるんだろうと。ひとつは、やはり坂道が多い。坂道が多いということを考えますと、あまり直線距離だけでは測れないという問題がありまして、高低差これも配置を考える場合には検討材料にすべきだとかですね。それから地形的に海岸線に沿って長い状態にあると。そうすれば道路を挟んで通学区域が設定される、あるいは学校配置されるということがあり得ますので、交通量の多い国道を挟むというような場合には、やはり安全性を確保するうえでの、そういったような特別な配慮が必要だとかですね。それから、雪であります。雪が多い。そうすれば、除雪の関係であるとか、通学に不自由を来さないような、そういった特別な配置を考える必要があるとか。大体こんなようなことが、小樽の特殊な事情として考えられるのではないかと思われるんですけども、さらにまたありましたらこの場で挙げていただければよろしいかと思っております。

委員

今出ました雪と坂と交通事情に関する点なんですけど。

まず、小樽は雪が多いというお話なんですけれども、私の感じからすると、小樽は雪はどっちかという少ない方だと思います。もっと少ない苫小牧や室蘭や十勝の方に比べればもちろん多いんですけども、旭川や岩見沢や、札幌の中でも中心部はあまり感じないと思いますけども手稲や北区の方の住宅地になるとかなり雪は多いです。ですから、私は小樽に来た時、非常に雪が少なくて温暖だし、すごく冬は過ごしやすいなという印象を受けましたし今でもそう思っています。ただ、何年かに一遍、例えば昨年冬のようにかたまって降るということはありませんけれども、平均してそんなに多い街ではないと思っています。

それから交通事情に関して。小樽は横に細長く国道で二分されるような地形になってますけれども、他の都市を考えても、新道ですとか大きなバイパスなんかがありますので。特に小樽はただ真ん中に国道5号線が走ってるということで、どうもそれが目立ってしまうんですけども、他都市のことを考えると大きな道路というのは無数にありますので、それは気をつけて渡るということをお教えることを考えるべきだと思います。

坂に関しては、小樽は坂が多いのは確かですけど、坂があるから何かができないという考え方ではなく、みんな生活している中でも坂というのは密着して、坂の街～良さを生かしたということもありますので、あまり坂があるから自転車に乗れないとか、坂があるから歩けないとか、大変だとか、あまりそこにこだわってしまうと、あまり話しが進まないんじゃないかなと思います。ですから、自転車なんかでも、坂があっても自転車乗ってる子なんかは高校生くらいになると～家が潮陵高校の下なんですけども～、潮陵高校生は結構自転車通学してる子もいますし、私も奥沢口付近から駅前まで結構自転車に乗っていくんですけども、国道を走るとアップダウンがきついので臨港線の方を回って。そうすると海沿いですので大体平らなので、それでかなり遠くの方まで行くこともできますので。工夫して乗る、気をつけて乗るということをお考えれば、中学校なんかでは自転車通学を認めても良いんじゃないかなと思います。

委員長

先程、私、小樽の特殊事情として挙げたんですけども、必ずしもそうでもなさそうだとかというご意見ですね。

委員

必ずしもそうでもないと思うんですけども。潮陵の坂は、はっきり言えばうちの地

区で言えばあれは坂だとは言わないないんですね。坂の中には入らないと子供も言いますので。とてもじゃないですけど、うちの中学校の坂は、子供は自転車では通えません。それに陸上競技場も近いので、途中までは皆さん自転車で来る方もたくさんいるみたいなんですけど、坂の途中に置いておいてあとは歩くみたいな形になってるので。坂にもいろいろあると思うので、そこは考慮に入れてほしいかなとは思っています。歩くことしかできないような坂はあるとは思いますが。

委員長

最終報告書を作成する時に、小樽のこういったような特殊な事情に特に配慮してほしいと、こんなような一文にするのかなと思ひまして先程は言ったんですが、特に入れる必要もないよというのであれば別に良いんですけど。どうですかね、私は坂の街ということで。

委員

雪の状況にしましても、小樽が北海道の中でも唯一雪が多いとは思っておりませんが、やはり雪は少ない訳ではなく、そしてその中で除雪の状況ということも考慮に入れていかなくちやいけないところがありまして。札幌市内、例えば除雪の状況が小樽よりは進んでいるような気がしている中で、小樽では通学路の中の雪で子供の事故が起きたこともありますので、やはり通学路の中の雪の状況というのは、考慮に入れてはつきり明示しておいた方が良いでしょう。気はします。

坂の方は、小学校はそんなに、そこによっては自転車でも可能かなと思うところもありますけど、中学校はかなり厳しい坂は厳しく、自転車ではとても上がれない学校も多数あると思っております。

委員長

坂も場所によりますね。潮陵の先程挙げられた所もあるかもしれないし、結構急なところもあるんじゃないかな。場所によりますよね。一概には言えないという気がしますね。やはり雪は小樽は少ない方ではないと思うんですね。やはり、「除雪等については通学区域の安全確保に注意してほしい」とか、あるいは「特に配慮してほしい」とか、こういうことをつけるのは私は構わないのではないかと、むしろ必要なことではないかなと思っておりますけども。

いずれにしても、小樽は、今言ったある一定程度は積もる訳ですし、それに対する十分な安全確保についての努力は、配置の適正を考える際にも考慮に入れるべきだと、そういう趣旨でございます。

委員

昔のことを言うときちょっと相応しくないかもしれないんですけど。私が中学生時代というのは昭和30年代ですが、通学距離はもっと長かったですよ。新制中学に切り替わった時に発足した中学校というのは、比較的下の方に建っていました。その後、生徒数の増加があつて新設されてきました。それは全部山の上なんです。土地の関係かとも思うんです。ですからそれは、じゃあ何故新設していったか、生徒数が増えて適正な教育ができないということでいったんだろうと思うんです。だから、その点から言うと、新設された時点では通学距離は短くなっていったんです。例をあげますと、潮見台中学校は昭和30年当時、通学の一番遠い子は朝里橋のたもと辺りから通っていたはずなんです。それが、桜町が新設されて通学距離が短くなりました。さらに望洋台が新設されて短くなりました。

今までの議論の中にもあつたと思うんですが、委員長おっしゃったように、通学距離だけではないかな。それよりもむしろ、学校規模といいますか、適正な学校規模ということを見点に入れていかなければ。結局、新設新設ときたのは、学級数が多くなりすぎて適正ではないということですから。今度は逆に生徒数が減少してきて、適正な教育には支障があるということで考えていった方が良いでしょうかなという気はします。

安全面とか何とかということ、これは条件的なものですから、除雪対策とかそういったところを整備していけば良いでしょうかなというふうに思います。

委員長

適正配置を考える場合の根底にありますのは、やはり規模ですかね。いろんな条件はありますが、中でもやはり規模ということは重要な要素だと、こういった

ことですかね。

今ご発言ありましたように、かつては児童生徒が多すぎたということから、規模を縮小する方で考えてきたところですけど、最近は逆に減り過ぎちゃったと。小樽の場合は特に大規模校というのはいずれなくなる訳で、むしろ小樽で考えなきゃいけないのは、小規模校あるいは過小規模校をどうするかということをやはり考えなきゃいけない。

本委員会に託された検討事項、これは、小規模校化、人口の減少をどうとらえるかということでございます。この委員会全体としての方向としては、やはり標準規模校ということをおさえるべきだということでございます。しかし、過小規模校、あるいは小規模校だからといって、一律に切り捨てるということはどうかと。やはり、地域的な事情なりいろんな諸条件、その他いろんなことを考えながら検討の対象にすべきだと、こういう方向で考えて参った訳でございます。

委員

規模を考えるという委員のおっしゃったことに賛成なんですけれども。まず規模を考える、それから過小規模校をどうするか考える。それプラスで雪や坂、あるいは交通事情、それから距離の問題というのも、こだわりすぎない程度に。雪や坂は確かに実際にありますので、そこら辺は考慮してということで。あまりこだわりすぎてしまうと話しが進まなくなってしまうという思いがありますので、そこを配慮していただくというのは結構だと思います。

委員長
委員

分かりました。

規模と配置を行ったり来たりで、当然そうなるだろうなと思ってるんですけども。

まず規模については、現状ある小樽の20人台といったコンパクトなサイズの学級というのは、非常に理想状態に近いので、今後こういう規模が続けられたらなというように考えております。しかも、学校の在り方としては、単学級じゃなくて、複数以上あるような学校全体の規模というように、どう維持していくのか。となってくると、単純な発想から言って、今現在、標準サイズに満たない学校規模が多いので、今言ったような状態に近づけていくとなると、小学校27校、中学校が14校あるけども、単純に言っても半数近くになっていくのかなと。そうすると、配置も今よりはまばらになっていくだろうなと。

その次に想定されるのは、保護者の方。例えば、小樽に移り住んできて、どこに居住地を構えるのか、となると、前にも委員から出ていましたけど、やはり学校が近いところ。小学生の子供をもつ親御さんとしたら、できるだけ小学校に歩いて数分で行けるような所。中学校はもう少し頑張って、10分ちょっとくらいで行けるような所。というようなことで、どこに住むかを決めていくんではなかろうかと思います。

そうすると、小樽の将来展望ですけども、だんだん住みやすい地域とそうでない地域というのができてきて。ただ、住みやすい地域となると、地価がどうなってるか分かりませんが、それも逆の意味でいくと高騰するかもしれない。だんだん小樽というのは住みづらくなっていくのかな、というようなこともちょっと危惧されます。

というのは、全く別次元と押さえるのか、夕張のことを考えますと、財政再建団体に陥って、小学校中学校とも1校に統合せざるを得ない状況。そうなってくると、かなり高齢化の街ですけども、～小樽も実際にそういう方向に進んでますけども～、本当に魅力ある街づくりという観点からいうと、人口がまたまた流出していくんではないかなということも危惧されます。それだけ、人口減それから子供の数の減少に伴ってこういう問題に手を付けざるを得ない状況だと思うんですけど、今、これをどうまとめていくかという中間報告の方向に向かっていく段階において、ちょっと気になったことということで述べさせていただきました。

委員長

だから、いたずらに小中学校を統合して数を減らすと、逆に小樽の人口減を加速させるのではないかと、こういうことですね。そのことは考える必要があると。

将来の、都市の発展、小樽市の発展ということを考えれば、切る方向というだけ

ではなくて、やはりある程度、小中学校の存在そのものも必要になるという意見で、なるほどと思うところもございましたけども。

確かに、引っ越し先を考える場合にチラシなんかにもよく出てますけども、小学校から何メートルとか出てますね確かに。これは、引っ越し先、移転先を考える場合の大きな判断要素となるんだというのが分かりますね。ある程度、学校は散らばっているというのは、人口誘引といいますか、減らすのを食い止めるということにも、ある程度寄与する点があるのではないかと。その事も考えるべきだと、こういうことですね。そのことは今まであまり考えていなかったことです。

委員

先程、委員長の方から、小学校と中学校の配置の条件ということで、こんなことも考えていかなければならない視点ということで示されてましたけど。やはり、今、ひとつの学級の人数とすれば、大体30前後を中心にしてしながらということで、複数学級というあたりが、大体、意見の主流をなしていると思います。あわせて、小規模、過小規模においても、地域あるいは歴史的なあたりを配慮をしなきゃいけない、というあたりはお互い確認し合えたと思うんですけど。

それじゃあ、小学校と中学校の関係を、どういうふうに設定していくのかというあたりで考えてみると、やはり少し議論がいるのかなと思うんです。例えば、ある周辺校のひとつの小学校から、すぐそのまま小中の連携ということで、1小学校からその地域の中学校へという場合もあるでしょうし。また、周辺の小学校が集まってひとつの中学校に進んでいくという方法もあるでしょうし。あるいは、ひとつの小学校から二つに分かれて右と左の中学校に進むということも出てくるでしょうし。そういった、やはり子供達がどう中学校へ進学していくのかということでの視点もいるのかなと思ったりしています。そんなことを考えていくと、ただ一概にその地域をどういうふうに分けるか、区切りだけではいけない部分が出てくるのかなと思ったりもしていますので、その辺りも論議してかかる必要があるかなというところですよ。

委員長

先程、私言いましたように。ひとつの小学校から中学校へ移るという場合もありますでしょうし、それから、複数の小学校からある特定の中学校へ通うという場合もあるんでしょうけど。大体そんなふうに、小学校時代に培った友人関係が、そのまま中学校でも継続できる、というような形態が望ましいでしょうかね。私は、大ざっぱにそう考える訳ですけど。せっかく小学校で仲良くなったのに、中学校でバラバラになってしまうというのではなんとなくね。多感な時期に。

委員

これは聞いた話なんですけども。やはりひとつの地域に、小学校があって中学校があって、同じ小学校のメンバーがそっくり同じ中学校へ行くところの。これは子供の話じゃなくてお母さんの話なんですけども。PTAの役員も、小学校中学校全部同じで。もちろん子供もクラス替えはあるんですけど、一定の枠の中で、新しい人が来る訳ではなく、出ていく人が多い訳でもなくというの。9年間同じ一定の人数、2クラス3クラスたとえ変わったとしても、同じメンバーで過ごすという中では、もうちょっと大きい意味での固定化というのでしょうか、メンバーが変わらないというところで、ちょっとねという話を聞いたことがあります。

委員長

全く同じというのではなくて、いくつかの小学校が集まってひとつの中学校へ行くというあたりが、なんとなく、新しい友達も増えるし、今まで作りあげてきた友人関係もあまり壊れないという気がするんですけどね、私なんかは。私は9年間同じでしたから、結構その頃は。しかし、9年間、兄弟同然に育ってきて、今逢いまして大変懐かしいといいますか、よく9年間同じ学校に通ったと、これは大変大きな私の財産だと思ってますけど。しかし、やはりなんとなく、これは私の感覚ですけど、ある程度、培った友人関係は壊さないような気遣い、配慮は必要ではないかと。

委員

9年間同じ中で、やはり人数がたくさんいる中での9年間は、特に委員長さんのように良いご経験の方が多かったようにも思うんですが、今のように人数が少ない中で9年間を同じ人間関係となると、今、いろいろいじめのこととかいっぱい出てき

てますよね。新しい人間関係が本当に築けない中で9年間というのは、やはり厳しいものがあって。新しい友達が増えたり、新しい環境、保護者、本当に変わった人間関係ができていく方が、子供が逞しく育っていけるような気がします。それが全て良いとは思いませんが。小樽市内の中では、やはり離れてる学校ほど小学校中学校ずっと一緒のところ、街の中の方ですと集まったところから、ひとつの中学校に皆さんで上がっていくという人間関係。それはそれで、いろいろ違う6年間を過ごしてきた子たちが混じっていくのでいろいろですが。子供はわりと馴染んでいきますよね。反対に同じ小学校から来た同士の中でいろいろあったり。新しい人間関係の中で必ずしも他の人を受け入れないとか、そういうことではないような。今まで見てきた中ではそのような感じがします。

委員

私も委員長さんのイメージがすごく分かるんです。委員長さんがどういうところにお住まいになっていたか分かりませんが。

(委員長:大変田舎の方です。)

当然、私くらいの人であれば、～私は緑町なんですけど～、いわゆる地域地域の中で、縦型の遊び集団が形成されていた訳ですね。ですから、それがきちんとした保障としてあったから、学校が小中ずっと一緒でも成り立ったと思うんですよ。まさに、そこが今全くないものですから。まさに学校の中で、今であれば、悪い言い方ですけど、ランクづけとか階層づけとか、位置づけみたいのが固定されてしまったら、そのままその役のままで、また補填されないままいきますから、それはきついという部分が今の実態としてあるんじゃないでしょうか。やはり非常に残念ですけど、地域での遊び集団、子供集団の崩壊というのはこれは、逆に言うと何か復活できないかなという、ひとつ、全く適配とは別の話しですけども、そういうものがやはり今一番大きな子供達の問題につながってるんじゃないかなという気がするんですけど。

委員

私も今聞いていて、特に今の子供達の家庭環境とか、昔に比べると兄弟関係も極端に少なくなってますし、どちらかという一人っ子も増えております。そういうことで、やはり家庭で子供同士の間人間関係にもまれるという経験が少ないですし、それから当然地域の中でも、今の子供達は地域で缶蹴りや遊ぶということもなくて、どちらかという家庭にこもるとかテレビゲームだとかに興じているというパターンが多いから、あえて学校という場所で、集団遊びのルールだとか、集団遊びのやり方だとか、そういうことを意図的に学級担任だとかが仕組んでいかないと、子供達はその中で育っていけないのが、今の子供達の実態だというふうに押さえています。

だからこそ例えば単学級じゃなくて、できれば複数学級あるような学校の規模で、学級替えがある中で、小学校を卒業するまでの間にいろんな人と出会うような場を設定する。という方向で今まで論議がきつと規模ということでやってきたんだろうなと理解してますし。中学校にもそのままスライド方式じゃなくて、私が以前に勤務していた島牧村の話しをしましたが、小中高とみんな同じ人間関係が続くというのはある意味窮屈な子供もおります。だから、小学校と中学校の配置の関係については、先程委員からもありましたけど、例えば、今は小学校が27校、中学校が14校ですから、単純なイメージでいうと小学校2校から中学校が出来上がるのかなというようなイメージだけど実際はそうじゃないです。そんなつくりじゃなくて、やはり3校4校の小学校から集まってきて、ひとつの中学校が出来上がるような配置の関係、そういうのが望ましいんじゃないかなと思います。

例えば、桜町中学校の実態は大上校長先生が一番良くご存じだと思うんですが、桜小学校と若竹小学校から参ります。桜小学校というのは規模の大きな小学校で、若竹小学校というのは規模の小さな学校でさらに潮見台中学校に行く子供もおります。そうすると、肩身が狭いんじゃないけども、桜町中学校へ行くと桜

小学校出身の子供達がたくさんおります。その中に若竹小学校の子供達が、1学級あたりにすると数人程度しか残らないといったら変だけでも、そういうような進学
の状況になっています。そうすると以前にもお話ししましたが、これは進学だから
受入校とかそういう話しじゃないんだけど、やはり受け入れる側が大多数で、受
け入れられる側、廃校になってなくなる学校の子供達は少数者となると、や
はりイメージ的に子供達は親も含めてだけでも、適配を進めていくうえでは、さっき
使った言葉で言うなら、ちょっと肩身の狭い思いをせざるを得ないような状況にあ
ると。ということで、今の子供達の実態を考えていくと、やはり先程も出てましたけ
ど、子供達は慣れていくと思います、大人以上に。ですから、いろんな経験を積ま
せてあげる場をどう設定するかというのは、やはり学校もそうですけども、大人の側
が、ある程度意図的に考えていかないと、なかなか難しい時代に入っているとい
うふうにおさえています。

委員長

私も必ずしも9年間同じ友人関係が望ましいと、こういうことを言っている訳じゃ
なくてですね、いくつかの小学校が集まる形で中学校の通学区域に通うというの
がよろしいのではないかと。新しい人間関係がそこで増える訳です。交友関係も
だんだん大きくなっていくと。こういうような考え方が望ましいのではないかと。

ですから、小学校で造りあげてきた友人関係が、むしろバラバラになるような壊
れるような、そういう中学校の通学区域の設定は必ずしも適当でないというようなこ
とですが。今お話しを伺っても大体そんなようなことですので。この委員会と
しましても、そういうような配慮ですけど、小学校中学校の適正配置を考える際
には、その辺のバランスなり均衡、あるいは小学校中学校での人間関係なり、ある
いは経験を自ら学ぶ場を増やすとか、そのようなことについての配慮が必要だと、こ
ういうようなことではないか。そのような方向でまとめるのが適当ではないかと考
えております。

それから、これは規模の問題とも関係しますけれども、中学校での例のがござい
ましたね、高校受験に向けての教科、担当の先生ですね。中学校の場合、ちょっ
とまた話しが戻りますけども、ある程度、高校受験対策ということを考えますと、ある
程度の規模、あるいは教科ごとの先生が配置できる程度の規模というのが、中学
校の場合は特別に配慮する必要があるのではないのかということが、3回目か2回
目の時にいろいろ話しが出ておりましたけど。この辺はどうなんでしょうね。また何
か参考になることがありましたらお話し願いたいんですが。

委員

結論的には委員長がおっしゃられてるとおりで私は良いと思うんです。ただ、受
験の問題になってくると、どうしても引っかかる部分がありますので。例えば、学校
教育法で定められている中学校教育の目標を達成するためには、やはり免許をし
っかり持った先生に教科を担当してもらいたい。免許外はやはり望ましくない。と
いうスタンスでいくと、中学校の適切な規模というのが、結論的には同じになると思
うんですけども、出てくると思うんです。受験受験を第一に考えるのではなくて、学
校教育法の例えば中学校教育の目標に照らし合わせて、それを達成する学校の
在り方というふうに考えていった場合の視点といたら、私も理解いたします。

委員長

そういうことですからね。受験というのは、あまり露骨すぎていろいろ問題にな
りますからね。

委員

反対に質問なんですけど、教科の専任の先生が、全て9教科受け持っていただ
ける環境のクラスというのは、12学級なんですか？中学校は。12学級ということは
1学年4クラス。

事務局

事務局からご説明いたします。

教員配置のことで、「資料9」でございまして。学校規模からみた教員の配置、下
の方の表だっただと思います。小学校と中学校の表がございまして、中学校の方を
ご覧いただきたいんですが、1学級から例示で20学級までありますけど、例えば6

学級のところをみていただきたいんですが。そうしますと11となっております。これは校長先生を含めてということなものですから、11から1を引くと10名。教頭先生は教鞭に立たれる場合もありますので、その中で回していくと。次に、9学級のところを見ていただきます。そうすると16になります。これは校長先生を除きますと15ということですよ。

今、教育活動の中で教科ということでいえば9教科、国・社・数・理・英・保健体育・技術家庭・美術・音楽ということで9です。例えば、仮に時数の多い5教科ということで考えますと、3年生までおりますので、3年生を1人の先生が全部受け持つということではなくて、複数、2名で例えばやりますと、5×2で10になります。そして、それ以外の、時数が若干少ない教科について4教科ございまして、それでお一人の先生が全学年担任するという事になれば、それで4ということですので、14になります。そして教頭先生が1名、そして校長先生、これを合わせますと16になる訳です。次に12というところで見えていただきますと21名ということで、これまたさらに9クラスから見ると5名増えるということですよ。考え方なんですけども、5教科以外でも、例えば保健体育ということになれば、男子と女子を別に教えるというか、そういう場面も出てきますし、あるいは技術家庭という分野においては、やはり専門的な部分で免許を持った方が教える場合の方が適切な場合も想定されるということになれば、先程申しました9学級の16人は最低クリアして、それに上乗せする形で、男女とかあるいは教科の授業の内容によっては受け持ちを分けてとか、そういうような形ができるのではないかなというふうに思っております。

委員長

それは理想型ですよ。16人最低確保し、さらにプラスアルファ。それは確かに望ましいといえますか、中学校の教育目標を達成するために必要な教員数を確保できる程度の学校規模、こういうことになりますから。それは確かに望ましい訳です。理想的な教育水準ということを考えれば、それはそうなるにこしたことはないということになりますけど、現実的問題としてはそれはなかなか難しいんじゃないでしょうか。全教科について複数の先生をそろえる、さらにプラスアルファと、こういうことになると大変難しいんじゃないかなと。

委員

質問したいことがあるんですけど。中学校の先生は1教科しか教えられないんですか？ 例えば、美術と体育ができますとか、国語と技術とか、そういうのは大体1つなんじゃないですか。

委員

その教師によるんですが、複数免許といひまして、一人で、今おっしゃったように複数の免許を持っている先生もいます。そうすると、例えば体育と国語を両教科持つことは可能です。けども、私のように1教科しか持っていない者もいる訳ですよ。

委員長

教科外の科目は絶対に教えられないと。

委員

免許制からいうとそうですけど。

委員長

そうですよね。

委員

ただ、学校事情で免許外申請というのをしまして、免許はないけれども、それが堪能で教えることはできますよという。それはただ最低限に抑えています。

委員長

そうですね。

委員

これからの先生は必ず2つ教えられるようにするとか、そうすると結構解決するんじゃないでしょうか。

委員

それは理想ですけど。

委員

なかなか難しいですね。

委員

でも例えば専門教科というのがあるんですよ。うちの中学校で、複数って本当に四つくらい持ってる先生がいるみたいなんです。体育と国語と社会と英語を。ただ、その先生は、体育と社会を結構教えてみたいなんですけど、でも英語も得意だから英語も聞いても大丈夫だよみたい。でも専門は体育みたいなんです

けど。たくさん複数教科を教えられる先生も結構いることはいるんですよ。

委員

そうですね。いることはいますね。ただ、これは大学の履修の関係だと思うんですけど。その中では、主免・副免というような形でよんでいるんです。

委員長

しかし、それにしても一人が四科目教えるというのは。

委員

でも実際には二科目くらいしか教えてないんです。ただ教えられるということは聞きました。

委員

最大限、現実的には二教科でしょうね。例えば、同じ一教科でも学年をまたがると、教えるのは二教科教えるのと同じことなんです。例えば、一年生、二年生を担当するといった場合、教材が違ってきますから、その準備というのがやはりかかりますから。

委員

規模と離れると思うんですけど。例えば先生方に二教科を教えていただくとか、そういうことになると。本当に先生方も、教科を教えていただく以外のお仕事ってほんと多いですよ。そういう中で、先生のご負担が多くなると、そのしわ寄せが結局のところは子供達にきて、精神的なこととかいろんなことが出てくるような状況も多くあると思うので。できれば先生に対しては十分な配置をお願いして、余裕を持って子供を見ていただけるような小樽市を、財政面で何とかしていただけないでしょうか。

委員長

これも難しい問題ですけども、今までお話しを伺ってますと、やはり中学校教育の目標達成し得るに足るだけの教員配置が望ましいと。「そういう点でのご配慮をぜひお願いしたい」とか、「そういう方向に向けて、ぜひ市としても十分これから検討していただきたい」とか、このような整理の仕方になりますかね。全部揃えろと、これは難しいんじゃないかと。

今、複数免許の話もありましたように、現実問題としては二科目担当するということもあり得るようですから、そちらの点でもある程度カバーできるという状況を考えますと、何が何でもそうしろというのは難しいかという気がしますので。「望ましい」というくらいにいたしましょうか。

大体、皆さんのご意見を伺いまして、実はこれからのスケジュールといいますか、大体今までお話しを伺った点で足りると思うのですが。特に前回まで、それから本日続きをいろいろご議論いただきまして、今、実は規模の点は終わりましたから、これについての委員会としての、中間報告のような形でのまとめの作業を続けているところでございます。今日、話しを伺いまして、さらに規模それから配置の適正を含めた、全体的な報告書の原案なり中間報告を急いで作成いたします。

12月にはもう(委員会は)ないんですかね、これからの予定ですけど。(次回は)1月の終わり頃でしょうか、ちょっと休み間をいただいて、その間に作業を進めますが、次回には一応お示しできるのではないかと。それに向けて私の方も努力いたします。それにつきまして、今までのご議論を踏まえて、原案のようなものを作成いたしますから、それを見ていただいて、またいろいろ修正を加えたり、あるいは意見を加えたりということをお願いしたいと考えています。

大体足りるかなと思っておりますけど、さらにまた皆さんの方であらためてご発言したい、あるいはご質問したいというようなことがありましたら、ちょっとまだ時間があるようでございますので、出していただければ結構でございます。今まで振り返りまして何でも結構でございます。大体いろいろ出尽くしたのではないかなと私の方は考えたんですが、さらにまたですね。

もしもなければ、先程ご説明しましたようなスケジュールでまいりたいと思っております。一番最初に考えておりましたスケジュールに、大体それで合ってる進み具合のように思われますので、それでよろしいのではないかと考えております。次回までに、ぜひ頑張って報告書の原案を作って皆さんにお示しいたします。次回の予定といいますか何か事務局の方でございませうか。

事務局

次回でございますけども、1月下旬か2月上旬あたりで日程調整をさせていただいて開催をしたいというふうに考えてございます。

時間の都合がつけば、前回お話しございました現地調査といいますか、市内の部分的になりますけども、1時間程度学校を見るような時間を設けまして、そのまま引き続き会議をというような予定で考えてございます。日程によりますけども、午前中であれば1時間程度現地そして1時間程度会議、午後であればもう少し会議の時間がとれるのかなというふうに考えてございます。

いずれにいたしましても、調整後、できるだけ早い時期にご案内したいと考えております。

委員長

中間報告の原案ができましたら、早めに皆さんに事前に配布いたしたいと考えておまして、それをぜひご覧になって次の会議に臨んでいただければと思っております。

それから、今、話しがありましたように、現地調査といいますか、調査というものじゃありませんけども、いったい通学状況はどうなっているのか、あるいは配置は適正かとか、いろんな観点から、ぜひ我々が現場に足を運ぶことも必要ではないか。私も子供が小学校を卒業しましてから数十年経てる訳でして、随分変わってきてるんだろうなという気もいたしますから、ぜひ通学区域について皆さん実感していただきたいと思っております、それでスケジュールの中に組み入れていただいた訳でございます。

大体よろしいでしょうか。以上のようなことになりますかよろしいでしょうか。皆さんそれでよろしいでしょうか。

(各委員うなずく)

委員長

それではそうさせていただきます。

今日は、(前回の)残りの分だったこともありまして、時間が早く終わりましたがけども、あとは1月の終わりあるいは2月の始めの日程となっていますので、また皆さんよろしく願いいたします。では本日はこれで終わります。

(以 上)